

濃尾震災と伊奈波神社

寛 真理子
(岐阜市歴史博物館学芸員)

明治二三年(一八九〇)春は、連年の不景気や凶作などで米価が高騰して餓えた人があふれ、各地で義捐金募集や困窮者への米・麦の支給が行われるありさまでした。さいわいその秋は豊作で、翌二四年も平年作の見通しがたち、ようやく一息つこうとした矢先の一〇月二八日午前六時三七分、マグニチュード八・〇を超える大地震が岐阜県を中心とした地域を襲いました。その激しさは、「倒れた身体が横に白を引きまわすように転がされた」などと記録されています。そして、直後に起こった火災がさらに被害を大きくしました。この大災害は「濃尾震災」と呼ばれています。

伊奈波神社祠官であった塩谷幸満が震災のようすを明治二五年一月にまとめた『震災記』が、博物館にお預かりした古文書の中

にふくまれています。地震発生四日後の一二月一日に発行された「岐阜日日新聞号外第一」掲載の「震災当時岐阜市内の実況」を一部利用しつつも、当事者ならではの情報が盛りこまれた迫力のある記録です。この『震災記』を中心に伊奈波神社周辺の地震当時のありさまを見ると、次のようなものでした(「内は『震災記』からの引用」)。

「朝雲ようやく散じ、太陽初めて昇り、万民まさに寝を出、戸を開き、管々としてその業につかんとするころおい、轟然たる響きとひとしく大地にわかに動揺して、波濤の澎湃(ほうはい)するがごとく、あるいは高くあるいは低く、見る見る諸所に欠裂を生じて噴水すると同時に家屋は転覆破壊し、人畜は号泣死傷、し震動およそ一分三十秒にして止む」。この

激しい地震で、神社境内の石灯籠や石垣も崩れ落ちました。震動時間は被害にあった人によって十秒とも十分とも答えており、極限状況での人間の感覚の頼りなさを思わせませす。ただし、測候所の地震計を破壊するほどの激震ののちも余震が繰り返し、二八日午後だけでも百回以上の震動が記録されています。

強烈な震動が止んで呆然としている人びとの耳に、火災を知らせる半鐘の音が響き渡りました。最初に出火したのは岐阜市秋津町にあった養糸組合事務所と伝えますが、すぐに木造町・下新町・七曲町(現在の本町七丁目)・鍛冶屋町(同四丁目)にも火の手が上がりました。家族や家を失った狼狽する市民は消火にとめる者も少なく、秋津町・七曲町・木造町はようやく消し止めたものの、他の二町の火は東北に向かつて広がりました。さらに午後二時ころから西北風が強く吹き、あおりたてられた火勢は東南方向へと町を焼き尽くしていったのです。そ



図1

のありさまは図1「岐阜全市大震大火の図」(館蔵)でうかがうことができます。これは一月二五日に発行されたもので、炎上する市街や苦しむ人たちの想像を交えながら描いています。

このとき、かなりの人数が家財とともに伊奈波神社に避難していました。しかし、西北風をまともに受ける境内は、延焼を防ぐ手立てはありませんでした。「飛び火雨に等しく、黒烟咫尺(しせき)わずかの距離」を弁せず、難を避け財を守る境内の市民はこれに巻き立てられ、号叫して父母あ

所だけでした。

でした。

るいは妻子に分かれ、思い思いに山上に通げ登りしは、目も当てられぬ有様なり」。

ここに至つて、塩谷幸満は急いで浄衣袴を着けて内陣のかぎを持ち、神体を守ろうとしましたが、重くて運ぶことができせん。そこでまず神宝・古額・棟札などを出したところで社丁の喜一と出会い、二人で力を合わせて四柱の神体を白木綿で包んで山上に遷し、新しい薦(こも)を敷いて奉座しました。このとき二人は、境内の大樹に火が燃え移るのを眼前にしながらも、目がくらみ息をはず

ませて動くこともできない状態

とした。伊奈波神社に近づいた火の手はまず近くの民家に及び、そこから「摂社愛宕神社に移り、その摂末社鳥居を焼き払うと見る間に、本社遙拝所大鳥居より水琴亭・雲錦楼及び我が県家花の寮に燃え移り、延びて塔の稲荷社及び境内に堆積せる市民の家財にまでひとしく発火するに至れり。これより前、本社拝殿はすでに飛び火付着して北部屋根より火焰をあげ、ただちに神饌所・神廐行事殿・宮門左右回廊・手水所および四近の立木に移り、ついに本殿摂末社をあわせて焼失するに至りしなり」。山上も山下も一面の火の海となり、午後三時ごろには宏壮な社殿はただ礎石を残し、鬱蒼と茂っていた老樹も枯れた幹を見せるだけとなってしまいました。図2は伊奈波神社参道付近の惨状の着色写真(館蔵)です。山ぎわまで見通せるほど全てが失われた中に枯木が突っ立ち、瓦礫が散らばっています。境内の建物で焼け残ったのは二棟の神庫と社務

市内に広がった火災は師範学校生徒や囚徒たちの活躍で次第に消し止められましたが、倒壊家屋で道をふさがれ、井戸水は枯渇し、消防用具も倒れた家の下になつていて使えず、消火活動は困難をきわめました。町の中央を東西に横断する堀が最後の防火線となり、死力を尽くして消火にとめたものの一部は堀を超えて南に燃え広がり、地震から丸一日以上たった二九日の午後二時になつてようやく鎮火しました。この堀は震災当時は「糞堀」というあまり

りありがたくない名で呼ばれていました。かつては岐阜城下町の南の備えてあったもので、現在は暗渠になっています。

伊奈波神社では類焼を免れた社務所に二九日に神体や宝物を遷し、一月四日には本社仮殿が造営されて仮遷座式が挙行されました。本格的復興のための十分な費用寄進は罹災した氏子からはどうも望むべくもありませんでしたが、内務省や市内有志者からの提供、上有知町・揖斐町など市外からの寄附も合わせた資金をもとに、明治三〇年一月二一日に本社・幣殿などが竣工し、正遷宮を行うことができたのでした。

博物館でお預かりしている社宝や縁起は、この大災害をくぐり抜けて守り通されたものです。そして、わずかに残された震災以前の古文書は、神体や神宝を救い出すので精一杯だったなかに全くの偶然で残されたことを思うと、社宝とならんで貴重なものを感じられます。



(図2)